



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 杉崎泰一郎「12世紀の修道院と社会」原書房                                                             |
| Author(s)        | 阿部, 包                                                                             |
| Citation         | 基督教学, 35, 33-37                                                                   |
| Issue Date       | 2000-07-07                                                                        |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/46629">https://hdl.handle.net/2115/46629</a> |
| Type             | other                                                                             |
| File Information | 35_33-37.pdf                                                                      |



杉崎泰一郎著

# 『12世紀の修道院と社会』 (原書房、一九九九年)

阿 部 包

本書は、著者が一九八九年から一九九八年にかけて、『上智史学』、『紀尾井史学』、『中世研究』、『基督教教学』、『西洋史学』および上智大学中世思想研究所編『中世思想原典集成』に発表した諸論文からなる論文集である。今回、一書に纏めるに当たって、初出時の表題はそれぞれ新しく改められた。全体は二部構成である。第一部は「広報文書としての奇跡物語」、第二部は「使徒的生活をめざす隠修士と社会」。前者は「奇跡について」にみる修道院と社会の諸相、「司牧活動としての奇跡物語―亡霊譚を中心に―」の二章からなり、後者は「改革理念の弁明と流布 クレルヴォーのベルナルドゥス著『グレイ

ルムス修道院長への弁明』、「荒れ野の楽園と社会―ラ・グラン・ド・シャルトル―」修道院の成立と発展」、「正統と異端のはざまの隠修士たち」の三章からなる。第一部、第二部ともに「序」と「結びにかえて」が付され、さらに全体を「はじめに」と「おわりに」が囲むという結構になっている。

十二世紀の教会の刷新については既に限なく研究し尽くされているように見えるが、しかし、当時の修道院では「奇跡集、聖人伝、教訓逸話集などの広報的性格の強い文書が多数書かれた。これらの文書が歴史研究の対象として盛んに使用されるようになったのは一九六〇年代に入ってからであり、その量が膨大なこともあって、その分析と解釈はまだ途上と言わざるをえない」（「はじめに」6頁）。そこで著者は、その時代の「修道士たちの広報活動に注目し、関連する資料を分析することで、情報を発信した修道士と、いわば観客としてこれを受信した修道院外部の人々との関わりについて論じ」（同7頁）ように考えたわけである。

考察の対象として選ばれたのは、伝統的なクリュニー、

改革派の旗手シトー、観想生活のラ・グランド・シャルトルーズ、遍歴説教活動のフォントヴロー、多数の俗人を受け入れたグランモンの各修道院である。因みにシトー以下は隠修士修道院である。情報の受け手を意識した修道士たちの活動を分析することで、結果的に俗人に関する理解を得るという「懸案課題」も達せられる、というのが著者の期待である（同8〜9頁）。

先ず第一部。クリュニーの第九代目修道院長ベトルス・ウエネラピリス（在位一一二一―五六年）が執筆した『奇跡について』の主として社会背景が投影した物語、さらに同書収録の亡霊譚とドイツのシトー会修道士カイステルバハのカエサリウス著『奇跡に関する対話』が資料である。

クリュニー修道士の出自は領主身分で、彼らの寄進が修道院の貴重な財源であり両者の関係は密接だった。ベトルスは、修道院の権益を侵す（修道院財産の私有化や教会財産横領）悪しき領主や、聖体の秘蹟を冒瀆する貪欲で迷信深い農夫を恫喝する一方、「罪人の避難所」としての修道院の伝統的な役割を投影した俗人救済方法を

示す（教会や修道院への寄進、ミサ・祈祷の依頼）。

その反面、彼は『奇跡について』第二巻の半分以上を占める司教マタエウス伝を通して、修道士としても司教としてもグレゴリウス改革精神を体現して規律肅正に尽力しながら「使徒的生活」の模範（「心に謙遜を衣に清貧を」）を示した修道士を称えた。このマタエウス伝と修道士ゲラルドウス伝からは、新興修道会による「使徒的生活」（断食、徹夜、苦行等）に対するベトルスの共感と改革への意欲がはつきり読み取られる。

次にベトルスの亡霊譚とカエサリウスのそれが比較分析される。前者は所謂「煉獄の誕生」（ル・ゴフ）直前、後者は煉獄誕生後告解制度が義務づけられた直後のものである。両者に共通するのは「現世の行いに応じて来世で報いを受けることを亡霊に語らせることで、生者への教訓を綴った」点である。著者は背景として贖罪理論の確立と教会によるモラル面の教化の進展を指摘する。ベトルスには修道院権益を守る意図が明瞭だが、カエサリウスはそこから一步を踏み出して「俗人の信心行をも救済に有効な手段として認め、世俗社会の教化に向かう姿

勢」を示している。

ペトルスが描く亡霊は、教会のモラルの語り部であり、彼によってキリスト教の枠に収めるべく換骨奪胎された「飼い馴らされた亡霊」である。一方カエサリウスが描くそれは、司牧対象の庶民への広がりを反映して、民衆の間に根強く残存していた土着信仰の亡霊に近づいている。著者は次のように読み解く。「土着信仰が根強く残る大衆を教化するために、彼は敢えて土着の亡霊の悪魔的、暴力的な性格をとりいれることで、民衆の心性との接点を探っていた。」また、「俗人が世俗生活を行いながら内面で改心したり、個人の信心行為を行うことを高く評価し、修道士のみが独占していた内面的な信仰生活を全信徒に広げるべく努力したのである。」(一一一頁)

第二部は「使徒的生活をめざす隠修士と社会」である。十一世紀のイタリアに始まり、フランスを経て遂には全西欧に広まった隠修士運動であるが、旧来の修道制支持陣営との間には少なからぬ軋轢が生じた。しかし、グレゴリウス改革を推進する教皇たちは、聖職者の綱紀粛正や俗人司牧の推進のためにしばしば彼らの活動を支援し

た。また、各地の司教たちも彼らを改革の前線基地として重視した。だが、これは同時に隠修士修道院が司教の保護監督下に入り、教会組織に正式に組み入れられることをも意味する。各修道院が受動性から自発性へと移行しつつあった俗人の欲求とどのように関わるかという問題は、必然的に教会権力の介入や修道院自体の変質と関係することになる。

ベルナルドゥスは『弁明』において、クリュニーの修道理念を称賛しつつも、現実の悪弊やベネディクトゥスの『戒律』からの逸脱(飲食、衣服、修道院長の怠慢・高慢、修道院内の装飾等)を批判することによって、隠修士的理想に一致するシトー会の使徒的生活を弁明し広く知らしめた。使徒的生活の理想を分かち合うのは、多様な修道士ばかりではない。俗人を含む教会内の諸身分も共に分かち合うのである。その意味で「われわれは一枚の着物となろうではないか」という彼の言葉は、直接的には修道士への呼びかけだとしても象徴的である。

厳しい山中のラ・グランド・シャルトルーズ修道院は、独居と共住を融合させた独自の修道院生活(断食、沈黙、

清貧、手仕事、読書、典札等）、修道士と別棟居住だが助修士の参加、正統的姿勢（托鉢、遍歴、女性の受け入れはない）、死者祈祷の禁止、等の特徴とする。寄進には慎重、放浪修道士の訪問は拒み、「荒れ野に隠遁する」理想を実現しつつも、シトー会（ベルナルドゥス）、クリュニー修道院（ペトルス）との情報交換によってその存在は広く知られた。

フォントヴロー修道院を創立したアルブリッセルのロベルトゥスは、使徒的生活を希求する運動の先駆者の一人である。著者は、『第一伝記』と近年発見された『第二伝記』完全版の仏訳との比較分析に基づいて、言わば史的ロベルトゥス像と彼の死後における同修道院の変質を描いている。彼の活動の核心は、遍歴説教による司牧にある。みすばらしい服装や極端な苦行、聖職者の身分的優位を無視する姿勢は、しばしば高位聖職者の非難を浴びた。彼の活動に対する俗人の熱狂も、彼を異端視させかねなかった。彼に同修道院の創建を促したのはボワティエ司教だったが、それは彼を正統的な修道院の枠内に引き戻すためだった。同修道院は男女併存で、ロベル

トゥスによって修道院内にレプラ患者施設、病者の館、元娼婦収容施設が設けられた。彼自身は後継者ペトロニユ修道女に修道院を委ね、苦行と説教の遍歴生活に戻った。ペトロニユは、師の死後二つの『伝記』で「師の正統的側面のみを伝えるときにも、フォントヴロー修道院の保守化と権力委譲の正統性を知らしめようとした」（二四五頁）。こうしてペトロニユの許、フォントヴロー修道院は遍歴説教や極端な苦行を放棄し、修道女中心の修道院（公文書には「女子修道院」の記載も）になって行く。批判をかわすためである。十二世紀という時代は、ロベルトゥスの精神を生かしきるほど成熟していなかったのである。

グランモン修道会はカリスマ的な隠修士ミユレのステファヌスによって創建された。特徴は、清貧を実践し、貧者を救済し、創立者の聖遺物に纏わる奇跡物語の流布（広報活動）によって多くの巡礼を受け入れたことであるが、何と言っても画期的なのは、助修士を修道士と対等に扱った点である。彼らは同じ棟に住み、共に聖務日課に参加し、修道院会議に出席、発言、投票する権利を

持ち、総会出席権も対等にあった。さらに、各支院の事実上の管理・経営は助修士が行なっていた。このような聖職者と俗人との平等は、当時としては革新的で多くの俗人の入会を促した。しかし、両者の間には次第に軋轢が生じ、幾多の紆余曲折の末最後には教皇の介入を招き、反乱した助修士の破門で決着した。

自発的な信仰の発現に目覚め、従属的な地位に甘んずることに反発する俗人たちにとって、俗人の権限を大きく認めるグランモン修道院は魅力的だっただろう。しかし、十二世紀の教会は次の世紀に確立されることになる教皇を頂点に頂く聖職者中心のヒエラルヒーを形成しつつあった。教会権力の介入による先の決着の大きな背景である。

著者が分析して見せてくれたのは、基本的には十三世紀に大きな結実を見ることになる修道院における「使徒的生活」の先駆的試み、と言い換えることもできるかもしれない。伝統のクリュニー内部の「使徒的生活」への共感と改革への意欲、そしてシトーからグランモンに至る隠修士修道院の言わば早すぎた試みとその結果として

の挫折と変質が、(新発見を含む)資料の丹念な読解と分析を通して跡づけられたことを喜ぶたい。

われわれとしては、著者自身が記している「教会との軋轢によって消滅していった隠修士修道院」の調査に基づくこの時代の隠修士(二七六頁)の全体像の解明を望みたい。また、司教とは違って敵対者を破門する権利のない修道士が代替行為として行なった「呪詛の典札」(二八一頁)に関する研究も進めて、修道院理解に新たな視点を導入してほしいと思う。

最後に、単なる誤植、変換間違いの類以外の若干の誤記を指摘して稿を閉じたい。三八頁の引用5行目「ゲラルドウス修道院長」は「ゲラルドウス修道士」、二二八頁の10行目「翌一一〇九年」は「翌一〇九六年」の誤りと思われる。なお、一九二頁6行目の参照が指示されている表一は三〇〇〜三〇三頁の「11、12世紀に創立した隠修士修道院一覧」であろうが、本文中に頁数を指示したり、三〇〇頁の見出しに「表一」の表記を付すなどの配慮が欲しかった。